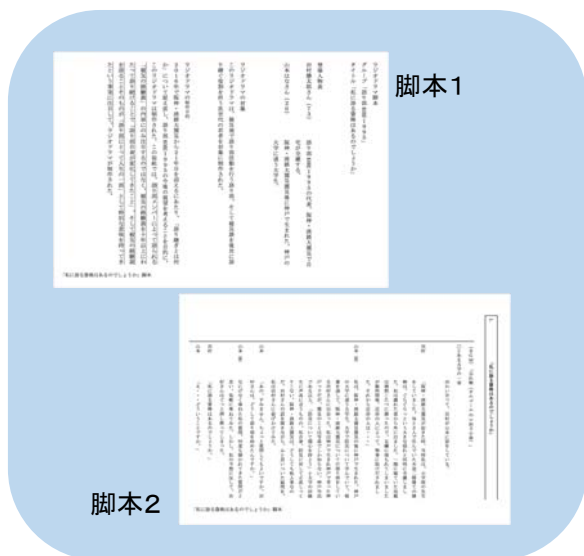




語り部 KOBE 1 9 9 5

タイトル	「私に語る資格はあるのでしょうか」
対象災害	地震災害
地域	兵庫県 神戸市
作品概要	<p>語り部 KOBE1995 の代表・田村勝太郎さんと、震災後に生まれた神戸在住の大学生が授業を通して出会い、語り部としての田村さんの悩みを聞きながら、「震災を知らない若い世代がどのように震災の記憶を語り継ぐべきか」について考え直す物語。</p> <p>10年以上、語り部活動が続けてきた田村さんの苦闘の話から、震災の語り継ぎとは、必ずしも本人が直接体験したことのみについて話すことではなく、人から聞いたエピソードを他の人に語り継ぐことでもあることを知り、震災を知らない自分も災害体験の伝承の担い手になりうること気づく。</p> <p>本作品は、語り部の「被災の経験談の内容」にのみ注目するのではなく、被災の経験談を十年以上にわたって語り続けることで「語り部自身が変化してきたという事実」に注目して制作された。阪神・淡路大震災の語り部の高齢化や、震災を知らない世代の登場など阪神・淡路大震災後21年目を迎える今だからこそ考えるべき「新しい語り継ぎの形」について、ラジオドラマで表現した。</p>
作品・活動 PR	<p>本作品は、語り部 KOBE1995 の新しい防災教材を作成するという目的のもと、被災地で語り部活動を行う語り部、被災談を後世に語り継ぐ役割を担う次世代の若者を対象に制作された。</p> <p>語り部が普段話す内容は、震災直後の被災の経験談についてのものが多いので、あえてラジオドラマ制作では「語り部が続けてきたことで感じたこと」「語り継ぎとはそもそもどういふことなのか」について改めて議論した。ラジオドラマの制作物を元に、千歳地区自主防災委員会などの地元団体との議論を行い、防災活動の後継者問題の解決策として今回の作品に対して強い共感を得た。</p> <p>語り部の依頼をしてきた数多くの学校や団体とのやりとりも参考にしつつ制作された。また、本作品は語り部 KOBE1995 の新しい防災教材として活用している。さらに、対外的な活用だけではなく、本作品の「語り部としての葛藤」はメンバー内での議論の呼び水になり、震災 21 年目を迎える新たな活動の展開を考える好材料として有効に活用している。</p>



語り部風景



定期例会



防災訓練での広報活動1

